

富士見橋
エコ広場館

《東京都北区》



エコのように広がり リサイクルの輪

拡大生産者責任とデポジット制度の実現をめざす全国ネットワーク 運営委員

なかい やちよ
中井 八千代

東京都北区、JR田端駅から数分のところに、住民主導で開設された市民活動拠点「富士見橋エコ広場館」があります。ライフスタイルを見直し、誰もが、何時でも気軽に参加し、交流し、多様な行動を起こしていくエコライフステージをめざして、1990（平成2）年に開設されました。

長年住民運動や地域づくりに関わってきた人々の夢と願いを実現したこの施設開設のキーパーソン、竹腰里子さんに、設立当時からの話と今後の方向性を語っていただきました。

区のリサイクルシステムづくり に取り組む

1991（平成3）年7月、区が設立した「第一次リサイクラー会議」に公募委員として参加、市民・業者・地元産業界が、行政と共に一つのテーブルに着き、北区のリサイクルシステム（計画）作りに取り組みました。

研修や実験を重ねながら、さまざまなリサイクルの手法を掘り起こし、編み出し、地域の特性を生かした、自分たちの生活に合わせたリサイクル活動を模索し、具体的な考え方をまとめていきました。これはのちに北区エコライフ宣言にも繋がりました。

びん、缶回収については、回収場所の設定やコンテナの保管、出し入れは全て地域住民が責任を持ち、行政の委託した



暮らしの博物館 1955（昭和30）年頃の茶の間

車が回収するというシステムを提案。現在、約25世帯に一箇所、4300人がコンテナの保管と週一回の出し入れを担っています。売上金は、連合町会ごとのエリアに還元され、地域活動などのコミュニケーション作りに活かされています。

第一次リサイクラー会議終了後、自主組織「北区リサイクラー活動機構」を会員140名で立ち上げ、エコ広場館の管理・事業運営を区から委託を受けて担うことになりました。現在は4館に増え、指定管理を受けています。

竹腰さんが語る、 エコ広場館の足跡

『17年前、富士見橋エコ館設立にあたっては、区は手を出さないから住民主体でやって欲しいとの強い信頼を受け、やるしかないと思い、それまでやっていた社長業を整理して全力でかかわりました。夢中でした。』

回収業者や住民、そして行政も加わり、大いに盛り上がったのを覚えています。社長業で培った経験「（適材適所に必要

な人を配置するなど)」が役にたちましたね。

初めての取り組みなので、見本がなく、本当に苦労しました。イベントでは①買うもの、休むところ、食べるものがあると人が集る。②一人ひとりの自己実現ができる場に、③そのために小さなことにも目配りを、と心がけてきたことが、成功のコツといえるでしょうか。今後は、「明日塾」で共に学びあいながら、方針を時代に合わせて工夫し、若い人につながりで行きたいと思っています。』

エコ広場館のこれから

現在はスタッフ130人で、「かわら版」の発行、暮らし方達人教室（リフォーム・リサイクル手芸）やリサイクル達人（修理・修繕事業）、子ども広場、我楽多市、古紙・古布回収、食育、生ごみ堆肥で育てた野菜の販売、地元商店街とグリーンコンシューマー地域実験プロジェクトなど毎日多様な事業を展開しています。

また暮らしの博物館として1955（昭和30）年頃のお茶の間と台所を再現し、日本の伝承文化を展示、夏はカキ氷、冬はお汁粉を100円で提供し、訪問する



夏休み子ども教室



ほっと村 食育ひろば

人々に喜ばれています。設立当初から店番をしているのは、元気な90代のおばあちゃん。

4館目の赤羽エコ広場館に開設された「食育広場」には、子ども連れの若い人も多く、みんなでお昼ご飯を作り一緒に食べながら、食材の産地や栄養のことなどを話し合う、異世代交流の場となっています。

長年培った生活の技を、達人として若い人に伝えていくエコ広場館は、生きがいと交流の場として、当初のリサイクルの活動拠点の目的をはるかに超えて、まちづくりの中心となって展開されてきたと、実感することができます。

しかし設立当初からのメンバーも高齢になっています。働く人が増え、若い人の担い手が少なくなっていますが、若い人に押し付けることはできません。

これからも若い人の参加と運営にかかわりやすい仕組みをつくり、子育てを通じた異世代交流とまちづくりをさらに広げていく拠点となることを、期待しています。